

戦争知らぬ母 平和願う手紙

主婦

(広島県 66)
私の子ども2人は40代で、孫は4人います。先月、当時小学校低学年だった子どもたち宛てに書いたものの渡さなかった、約35年前の手紙を見つけました。

「あなたたちがもっと小さい頃、広島県の平和記念資料館に入りました。それからですね。いろんなものを怖がりだしたのは。戦争は怖く悲しいものなのです。」

お母さんの生まれた山口県の町から船で行ける大津島には、『回天』の訓練基地跡と記念館があります。若いころ何度か行きました。回天は魚雷を改造した1人乗

りの特攻兵器で、出撃したら外に出られず、敵艦に体当たりしたのです。展示してある模型の回天を見た時は息がつまりそうでした。基地跡の近くに座って海を見ました。静かでした。回天に乗った兵隊さんが『お母さん』と泣いて出て行く姿を想像しました。

お母さんも戦争を知りません。あなたたちにも次の子どもたちにも、ずっと戦争のない静かで青い空がありますように。」

戦後70年のいま、戦争ができる国にしよつとする安全保障関連法案をとんでも危険に感じます。母として祖母として反戦と平和への願いは強まるばかりです。

8/22
朝日

「謝罪」重ね 信頼得たドイツ

大学名誉教授

(千葉県 68)

安倍晋三首相の戦後70年談話、村山・小泉談話の形式的な継続で真意が読みとれず、何のためかとの声もあがった。しかし、この継続的な談話が出なかつたら、諸外国から日本国民はどのように見られるであろう。

私が談話で納得できないのは次世代に「謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」という一節である。日本の植民地支配や侵略を語ることは「反省」と「おわび」も含め「セット」なのだ。この原点から平和への願いが高まり、行動が重なられて次世代が受け継ぐのである。

ドイツ社会は、これを世界に示し、隣国との和解を成し遂げ

信頼関係を築いた。17年前、「アウシュビッツ」を繰り返す語ることは次世代にとって負担が重すぎると、作家マルティン・ヴァルザーが述べ、これに当時のユダヤ人中央評議会会長が反論し、賛否両論の激しい論争がドイツ社会を巻き込んだ。

しかし結局、ドイツ社会は、過去への反省と謝罪を永久に語り継ぐことを選んだ。現在も反省とおわびの実践として、大統領はフランスやポーランドへ出かけて献花し、陳謝している。この姿勢が国際社会の信頼を得るドイツの原動力なのである。

戦場の島のキャッチボール

無職

(香川県 68)

高校野球100年となる節目の全国選手権大会が終わりました。夏の大会は1941年から5年間、戦争で中断。その間に多くの選手たちが学徒出陣で戦場に赴き、命を失いました。

高松商野球部員だった私も海軍を志願。43年11月、16歳でインドネシアのアンボン島へ。ハロンの防空砲台で中隊長の身の回りの世話をしました。ある日、中隊長がグラブとミットを持ってきて「受けてくれ」と言うので、昼食後に何度かキャッチボールをしました。すごい球でしたが「夏の甲子園で投げ

たことがある。あがりっ放した」と話してくれました。

敗戦後、私は捕虜となり46年に復員。中隊長の消息は分かりませんでした。数年後、雑誌で高校野球の記事を読んだ時、中隊長が39年の第25回大会準優勝校、山口の下関商のエース友浦只夫投手と気がきました。決勝の相手は和歌山の海草中(現向陽高)。準決勝と決勝で無安打無得点試合を達成した伝説の嶋清一投手と投げ合ったのです。真剣にプレーする球児たちの大会をなくしてはなりません。戦争のない平和を望みます。

〈編集部注〉友浦氏は復員し60年に広島で病没されたことが関係者のお話で分かりました。